

両手に荷物をまとめて立ち、一年半ぶりに帰省する僕を乗せる列車。両脇に荷物を置いて座るロングシート。発車まで静かな車内。乗客は他に二人。彩りのない車内を彩るように、車内の前方と後方に腰かける二人。左側後方に座る四十前後の女性。ベージュのチノパンにピンクのブラウス、カーキ色のバック。右側前方には初老の男性。ブルーのジーパンにギンガムチェックのシャツ、黄色のリュックサック。それぞれの首にはネックレスと一眼レフ。

この二人の間に座つたのが僕。青いポロシャツに白いハーパン。黒いスニーカー、黒いバック、黒いメガネ、黒い瞳。見ている物は列車の窓越しに映る地方病院の看板。ホームにいる頃からずっと見ている看板。もう覚えてしまった院長の名前と電話番号。こんな僕でもわからない隣の看板の和菓子屋。半開きの列車のカーテンが隠す、店の名前と電話番号。それがわからないことは、ありつけないあの白い大福。

止まないディーゼルエンジン。間もなく八時。発車のチャイム。閉まるドア。動き出す列車。流れ出す風景。一瞬だけ見えた大福屋の名前。でもすぐにカーテンの影絵。抜けるホーム。真横をかすめる住宅。一瞬だけ目に映つて、カーテンの影絵。切り取る住人達の日常。

しばらくすると流れる自動アナウンス。すぐに最初の駅。住宅街の中にある無人駅。さびれたホーム。誰も降りず、誰も乗らないホーム。そんなホームに別れを告げる列車。ここから先、目的地まで繰り返すであろう光景。

再び走り出す列車。終点が僕の故郷。ここから約一時間半。正直不便な故郷。だから僕が嫌いな故郷。でも一年後、ダム湖に沈む僕の故郷。

高校時代、両親の猛反対を押し切り受験した都会の大学。大学時代、両親の猛反対を押し切り転居した都会の下宿。そんな僕を毎回しきりつける両親。僕になつて欲しいのは農家の跡取り。

一人息子の僕。少年時代から決められている将来。決めている進路。決まっている職業。大人に近づくたびに具体性が増していく両親の欲求。それは僕の欲求とかけ離れた欲求。僕がなりたいのは新聞記者。決まっている生活。決まっている日常。そして決まっている結婚相手。許嫁、田内花。一つ年上。世話を焼き。でも甘えん坊。僕と同じ農家の一人娘。僕の幼馴染。僕の初恋相手。

「夕貴くんは泣き虫さんだから、うちが結婚してあげんと心配やー」

耳をかすめた幼い花の声。あれは九歳の夏。花の家。昼過ぎの縁側。僕の家族と花の家族で分け合つた一つの西瓜。大きくて瑞々しくておいしそうな西瓜。その西瓜一切れを地面に落とした僕。赤い果汁が染みこむ土。赤い果肉に群がる蟻。たまらず泣きだした僕。悔しさや後悔が涙の理由。それを理解するのはもう少し後。